

パスワード Yasu-aka001

靖文さん、毎日のお仕事お疲れ様です。この前あなたが浣腸に関して興味ある文章を私に書いて読ませて頂きました。

そこで、こんどは私からのお返しです。

内容は私たちが知り合ってから一年間を超える期間の浣腸に関わる出来事を偽りなく書きました。ただ印刷は避けてね。パソコン内でのみお読み下さい。読み終わったら感想を聞かせてね。

あかね

1 私の嫁ぎ先

昨年春、私は生まれ育った都心を離れ、隣県の山間地域に嫁ぎました。

知人には仕事先で知り合った彼と交際し、結婚に至ったと伝えましたが少しだけ違いがあります。

それは、私たちが愛情と信頼関係で結婚に至ったことに間違いはありませんが、もう一つ、本当の出会いが仕事の疲れを癒すためネットサーフィンをしていたとき、偶然辿り着いた浣腸のサイトで靖文さんと知り合えたことでした。

サイト内では架空の名前、靖文さんは「TAKA」、私は「ちさと」と名乗り交流を続けました。

知り合って四ヶ月ほどして、初めて都内の喫茶店で出会うことになりました。

中肉中背の私に比べ、靖文さんは背が高く、真面目そうな方だなと思ったのが第一印象です。

その後二度三度とお会いして、靖文さんと私の浣腸に対する思いが一致し、また四度目に会って体の関係を持ちました。

靖文さんの人柄と仕事の将来性も不安なく結婚に至りました。

ただ、靖文さんの住む場所には驚きました。

都心の近郊に育った私が、隣県の海拔5百メートルを超える、テレビで話題の「ぼつんと一軒家」を地で行くような場所に住むことになったのです。

以前は近隣に六軒ほどが暮らす集落だったと聞きますが、今は靖文さん宅一軒のみ。

眼下に広がる広大な森と、見上げる空の美しさはまさに絶景です。

家屋は母屋(中心となる建物)、結婚に合わせてリニューールした二階建家屋(一階は3台が入る車庫)、納屋(別棟に建てられた物置)、蔵(家財を安全に保管するための倉庫)、そして風呂便所(二階建家屋にもリニューール時に二階部分にトイレを設置)からなり、家族は私たち夫婦と義母の三人、それと愛犬一匹。

義父は三年ほど前に病没しています。

私たち夫婦はパソコンを利用するほか、二階寝室の奥には納戸があり、納戸を開くと衣類を吊るす場所の一番奥に三段の引き出しが付いた大きな収納庫があります。

そこには浣腸器具一式、大人のおもちゃ、性的な書籍などを保管しており、たまに都心に出たときなど、珍しいものがあれば買って保管しています。

そして私たちはこの二階で浣腸やSEXを楽しんでいます。

2 お義母さんからされた浣腸

あなたが三日間の出張から帰る日、私は便秘が続き、あなたが帰ったら浣腸してもらおうと思っていました。

その日、いつも食事をする母屋の居間でお義母さんと私は昼食を済ませ、午後1時を過ぎて私は台所で食器

類を洗い終え、お義母さんは家の前で畑仕事をするために地下足袋(じかたび)を履こうとしていました。

そのとき私が不用意に、「お義母さん、私もう一週間近く出てなくて少しおなかが苦しい。」と口にしたのです。お義母さんもきつと「体を大切にしてくね。」程度の言葉を頂けるものと思ったのですが、少し違う展開になったのです。

「あかねちゃん便秘ね、よくあることよ。ところで今までに浣腸をしたことはあるでしょう?」

「あつ、はい、小さいときに母がイチジク浣腸を…」

「そう、少し恥ずかしいと思うけど、一週間も出てないなら、家に浣腸器があるからそれで浣腸してみない?」

私の部屋に注射器型の浣腸器があるから今からしてあげる」

私はその話を聞いて慌てました。

「お義母さん、今日靖文さんが帰ってきたら、明日にでも町のドラッグストアで便秘薬を買ってきてもらいますからいいです。」

「便秘薬の効果はどうかしらね。この辺りは下の町に行くのが遠くてね、病気になつても簡単にはお医者さんを呼べなかったの。だから体が悪いときは先ず浣腸したの。あなたもこんな田舎に来たのだから一度浣腸を試してみない? 全然恥ずかしいことじゃないのよ。」

「お義母さん、恥ずかしいです。」(本当は浣腸愛好者ですが…)

そういうとお義母さんは履きかけていた地下足袋を脱ぎ、足早に奥の部屋に行き、ビニール袋に入れた「浣腸器50cc」と書かれた紙箱と、グリセリンの瓶、それと化粧品のクリームを持ってきて座卓の上に置いたのです。

私は座卓に置かれたビニール袋に入った浣腸器の紙箱を見て、恐る恐る尋ねました。

「お義母さん。これ、浣腸器ですか?」

「そうよ、開けてみて。子どもたちにもしたのよ。先端が丸くなった注射器でね、お尻にいれても全然痛くない

のよ。」

そう言われて四角い箱を手につつふたを開けてみました。

これが靖文さんもされたこともある浣腸器なんだと思うと、私が母にされてきたグリセリン浣腸が思い出されます。

この際お義母さんに浣腸をされても良いかななんて、そんな気持ちも微かに湧くのでした。

そのときお義母さんがこんな話をされたのです。

「浣腸器は昔から、この辺では生きるための器具でね。どの家庭にもあつたし、子どもが出来た家庭には婦人会が浣腸器を贈ったこともあるのよ。私が嫁いできてあるとき便秘がひどくてね、夕飯を終えておじいさんとおばあさんが座るこの部屋の、ガラス戸一枚はさんだ隣の部屋で、私がうつ伏せになり、夫に浣腸されたのよ。」

「両親は私が浣腸をされていることはわかっていたし、お便所に走っていくところも見られて恥ずかしかったけど、それが普通の家庭の出来事だったの。私、夫にもたびたび浣腸したこともあるのよ。今後の出産も浣腸にはお世話になるから、今経験しておきなさい。」

そういうのでした。

それで浣腸する理由は分かりましたが、それでもやはり恥ずかしくて、「本当にこれですか？」と再度尋ねると、お義母さんは少し叱るように、「浣腸して腸の中を薬で洗うの。いいわね！」と言って立ち上り、足早に台所に行き、50cc程の水をコップに入れて戻ってきたのでした。

座敷に座るとお義母さんは、「あかねちゃんは今もう子どもじゃないから二回入れるわね」といって、水の入ったコップに同量のグリセリンを入れてから、左手で浣腸器を持ち、右手でピストンを上下させて混ぜました。

「浣腸するからうつ伏せになつてお尻を出しなさい。」

私は仕方なく四つん這いになり、右手でスカートをめくり、パンティを足首まで下ろした後、足のキツさを緩めるために右足をパンティから脱ぎました。

「これでいいですか？」

「それでいいのよ。じっとしていいね。」

お義母さんはヒストンを押して空になつた浣腸器を座卓の上に置き、正座して、「痔などがないか先に見ておくわね。」というと、左手でお尻を押さえて、右手親指と人差し指で肛門を開きました。

ヒダをゆつくり検査し、私は前を向いてされるままに姿勢を保っていました。

3 お姉さん訪問

そのとき突然、玄関の戸が開き、お義姉さんが現れたのです。

私は「イヤあゝー!」と驚きの声を発しました。

お義姉さんは座卓にある浣腸器を見て、「あかねちゃん、浣腸されているのね。」というもまったく驚く気配はありません。

居間になると、四つん這いになつた私の肛門を検査するお義母さんに向かって、「お母ちゃん、奥の部屋に行つているからあかねちゃんの浣腸が終わつたら来て。」というと、スーパーマーケットで買った総菜等を台所の冷蔵庫に入れて、奥の部屋に行つてしまいました。

私はお義母さんとの混乱した中で、お姉さんの車の音に気付かなかつたのです。お姉さんが奥の部屋に入つていた後、私は四つん這いのまま「お義母さん、私恥ずかしい…」と言つたのでした。

そういうとお義母さんは、「大丈夫よ。実はね、あの子(姉)が来たのは、今私も便秘が続いていてね、浣腸してもらつたために呼んでいたの。」というのです。

「お義母さん、私の浣腸が終わつたらお姉さんに浣腸してもらうの?」

「そう、便秘がひどくてね。」

といつつ、指でクリームを取ると、浣腸器の嘴管と、私の肛門にも塗り込むのです。

そのときのクリームが付いた指が直腸内部にまではいつてきてしばらくの間マッサージをしたのです。

どうして直腸内部までマッサージする必要があるのか不思議に感じたのですが、何か非常に快感めいたものを感じてしまいました。

もしかしたらお義母さんは私に「浣腸の快感を教え込もうとしているのでは？」などと思つたのです。

やがて、肛門に差し込んだ浣腸器の嘴管から生ぬるい液体が入ってきて、そこにはグリセリンが暴れ出すような重い気持ち悪さがありました。

「二度目を入れるわね。」というと、残りの浣腸薬をコップから吸いあげて、私の肛門に注腸が始まったとき、今度は突然、玄関の戸を開けて夫が入ってきたのです。

4 夫の帰宅

突然、「ただいま、出張先から直帰で帰ってきたよ。」と夫が入ってきたのです。

お義母さんは正座して私の肛門に浣腸器を差し込んだまま、「靖文お帰り、いまあかねちゃんに浣腸しているところ。」と言いつつのです。

私はお姉さんに加えて、夫帰宅の驚きに声が出ませませんでした。

しかし夫は平然と「そうか、お母ちゃんすまないね。服を着替えたなら降りてくるから。」と行って、買ってきたお土産を仏壇に供えると、二階に上がって行ってしまいました。

まったく、私が浣腸されている最中に、突然お姉さんにも夫にも見られるなんて、驚きと恥ずかしさと、私の運の悪さを嘆きました。

浣腸薬を入れてまもなく、私のおなかを痛みが襲ってきました。これが本当の、「浣腸の痛さ」だったのです。

私が、「お義母さん、おなか痛くなってきました。」というと、「あかねちゃん、出来るだけ我慢してね。すぐ出すと

浣腸薬しか出ないから。」というのです。

そのとき私は目を閉じていたのですが、ふと薄目をあけて一瞬振り返ると、お義母さんの目が、私の陰部に注がれているのです。

私は恥ずかしいと思いつつも、お義母さんに陰部を見られておなかの痛さをじつと我慢するのも悪くないなと変な感じをしたのでした。

やがておなかゴロゴロという音を出し始めて、排泄を促す蠕動が周期的に襲ってくるようになりました。

私の肛門からは、プツ、プツという恥ずかしい音が出てきます。

お義母さんの了解を得て、上向けに折ったスカートを降ろし、足先に下げたパンティを元に戻して一階の便所に走り込みました。

便器にしゃがむと、煽動に耐え切れなくなった肛門から浣腸液が漏れ始め、そして恥ずかしい破裂音と恥ずかしい臭いを撒き散らしてたくさん便秘を排泄し、オシッコも出しました。

5分ほどしゃがんだ後、手を洗って居間に帰り、「たくさん出ました。」という、「あかねちゃんよく頑張ったわね、偉かったわ。」といわれ、無事浣腸を終えることが出来ました。

その後私は居間に残り、お義母さんは台所で洗浄した浣腸器を袋に入れ、グリセリンの薬などと一緒に奥の部屋に戻りました。

まもなく、二階から降りてきた靖文さんに、「あかね、お義母さんに浣腸されて本当に恥ずかしかったよ。それをあなたにも、お姉さんにもみられたのよ。」と半泣き状態で話しました。

また、今奥の部屋でお姉さんにお義母さんが浣腸してもらっていることも伝えました。

「そうだね、恥ずかしかったね。ごめん、ごめん。」

「それにしても不思議なんだけど。お姉さんもだけど、靖文さんも、あかねが浣腸されているのに全然驚かなかったね。」

「うちの家では母に浣腸されるのは当たり前すぎて、驚かないんだ。」

その言葉に私が驚いてしまいました。

5 お姉さんがお義母さんにした浣腸

「ねえ靖文さん、お義母さんはもう浣腸されているのかなあ？」

「そうだね、興味があれば見てきたらどうだい。うちでは浣腸するところを見内に見られたからといって恥ずかしがることはないから。」

「それじゃ見に行ってもいいの？」

「ごっへ。」

その声で私は奥の部屋に向かいました。

「お義母さん、あかねです。入つていいですか？」

「入つてきなさい。」というお義母さんの声が聞こえます。

襖を開けると、敷布団にバスタオルを敷き、その上に下半身裸で顔を両手に乗せてうつ伏せに寝たお義母さんがいました。

お姉さんは「お母ちゃん、便が沢山溜まっていてね。」と言いながら、座卓の上で浣腸薬を準備しているところでした。

私はお姉さんの隣に座り、「どれくらい入れるのですか、お姉さん。」と聞くと、「200cc入れるのよ。」と言うのです。

「私も見ています。」と言つと「見ていて。」というのです。

「お母ちゃん、浣腸するから四つん這いになつて。」

お義母さんは四つん這いの格好をとりました。

そのとき私はお義母さんが先ほど私にした、直腸内部を指でマッサージをしたことが忘れられず、お姉さんはお義母さんにそれをするのだろうかと黙って見ていると、なんとお姉さんは右手人差し指でクリームをすくい、嘴管に塗った後、直腸内にいれて、私が受けた以上にグイグイとマッサージを始めたのです。

ここでお姉さんに私がもし、「直腸内をマッサージするのはなぜ?」と聞けば、「嘴管で直腸内を傷つけないための準備よ。」程度の返事しか返ってこないと思い、あえて聞きませんでした。

時間にして3分ほどの行為は、お姉さんがお義母さんに与えた、浣腸前の快感の高揚ではないかと思つたものでした。

お姉さんの右指がお義母さんの直腸内をマッサージすると、今度は肛門に浣腸器の嘴管を差し込み、4回に分けて注腸(200cc)し、その後お義母さんはトイレに行つて排便を終えて奥の部屋に戻ってきました。

その後お姉さんは浣腸器一式を台所に運び、綺麗に洗つてから襖の引き出しの二段目に戻し、その後三人全員で居間に移り、そこには夫もいました。

お姉さんは娘さんの用事があるからとすぐに帰りました。

その後、夜になり、家族三人は夕飯を終えるとお義母さんは奥の部屋に戻り、私たちは居間でテレビを観てから二階建家屋に戻りました。

6 子供の頃のこと

「今日は驚く一日だったわ。私、お義母さんに便秘の話をしたばかりに浣腸されてしまったし、しているところをお姉さんにも、靖文さんにも見られたから…」

「恥ずかしかったね。ごめん、ごめん。」

夫は再度あやまり、慰めてくれました。

そして夫は今まで聞くことのなかったお姉さんとの浣腸プレイのことを話してくれました。



「実は小さいころにね、姉と自分で浣腸をしたことがあるんだ。何歳の頃からだったか忘れたけど子ども部屋で、最初はお互いに肛門にマツチ棒の先を入れたりして遊んだけど、あるとき姉が奥の部屋から浣腸器を取り出してきてね。最初はお尻に空気を入れるだけだったけどそのうち、水をいれてみようということになって、それ以降、水で浣腸をしていたんだ。姉が小学六年生まで。自分が小学三年生までだったけど、それ以降はなかったなあ。今考えると、そのころから自分の性器が固くなり始めたことか、姉の生理もやめた原因かも知れない。」

「小さい頃、お姉さんと浣腸をしていたのね。なぜか私、そのことをしていた気がしていたの。実は恥ずかしいけどね。私も子供の頃、お姉ちゃんと一緒に浣腸をしていたのよ。というよりも、私たち二人がお母さんから浣腸をされて育つたと言われた方が適切かもしれないの。高校生のころまで。」

「靖文さんには言つてなかったけど、今のお母さんは私の本当のお母さんじゃないのよ。」

「ええっ、知らなかった。けどお母さんは優しい人だけど、無理にそんなことをしたの?」

「本当のお母さんは私たち姉妹が小さい頃に病気で亡くなっているね、今のお母さんは再婚した義理のお母さんなの。そのお母さんが嫁いできたとき、私は小学一年生、姉は小学三年生でね、本当のお母さんのことは私の記憶にないのよ。」

「そうなのか。」

「私たち姉妹はすぐにお母さんが好きになつてね。もちろん今も好きなんだけど、私たち姉妹はお母さんに浣腸の魅力を教え込まれた気がするの。体調が悪いときは当然としてね、軽いいたずらでも、悪い子にはお仕置が必要ということで連帯責任といつてね、姉妹のどちらか一方がお仕置きの対象になると二人一緒に浣腸をされたの。けど、あるときお母さんが、「お父さんには浣腸のことは黙っていてね、お父さんは浣腸嫌いな人だから。」と言われて、浣腸は母と姉妹三人の秘密だったのよ。けど、そのおかげで靖文さんと一緒になれたことが嬉しいの。」

「そうか、自分もその話を聞いて安心したよ。言葉悪いかもしれないけど、長年の浣腸が身に着いてしまったんだね。自分も浣腸を離れることが出来ない者として、これからも二人一緒に生涯の秘密として生きて行くよ。」

「そうね、嬉しい。」

そんな会話を交わしました。

「ところで靖文さん、私今日変な体験をしたのよ。お義母さんが私に浣腸するとき、直腸内に嘴管を入れるまえにね、私の直腸内にクリームをすくった指を入れて少しのあいだ直腸内をマッサージしたの。そこでお姉さんがお義母さんに浣腸するとき、同じく直腸内をいじるのかなと思っていたら、なんと私がされた以上にお義母さんの直腸内を指でマッサージしたのよ。あの行為はお義母さんに性感を与える行為じゃなかったのかなと思っただけ。靖文さんも子供の頃、お母さんに浣腸されたとき、快感を与えてもらったことはあったの？」

「それはなかったなあ。けど自分は母に浣腸されたのは小学生までだったんだ。姉は高校を卒業しても浣腸されていたみただから、母か姉のどちらかがその行為を知って、その行為を行なううちに浣腸するときの当り前の行為になったかもしれない。」

「そうかもしれないね。」と言い終えて、その夜は二人で激しい性交を重ねて果てました。

7 お義母さんの性感高揚

二月ほど経った金曜日の夕方、仕事から帰った靖文さんが二階の部屋で私に、「今朝、出掛けに母に呼び止められてね。母の便秘がひどくて、あかねに浣腸してもらえないか聞いて欲しいと言われたんだけど、どうする？」と聞かれたのです。

偶然ですが私も便秘気味で、夜にでも夫に浣腸をお願いしようと思っていたところでした。

「私はいいけど、今晚あかねにも浣腸してね。この前から便秘気味なの。」と言ったのです。

すると夫は、「どうだろう。あかねも便秘しているなら二階にはグリセリンを買っていないから、一層のこと、自

分が母屋の奥の部屋で、母とあかねの二人にグリセリン浣腸をするのはどうだろう。」というのです。

私は「お義母さんと一緒に浣腸でもいいよ。」と言いました。

すると夫は二階を降りて母屋の奥の部屋に行き、「今朝のことだけど、あかねも今便秘でね、この前の浣腸がよく効いたから、今度は自分がお母ちゃんとあかねと一緒にこの部屋で浣腸したいと思うけど、どうだろう？」と尋ね、お義母さんは満面の笑みを返したとのことでした。

夕食前にお義母さんがお風呂を済ませ、夕食を済ませて二人がお風呂に入り、その後二人で奥の部屋に向かいました。

部屋にはすでに敷布団が二枚敷かれ、それぞれにバスタオルが載せられていて、部屋の端に寄せた座卓には浣腸器とグリセリンの瓶、クリーム、大きなコップがいつでも使えるように準備されていました。

夫は座卓に向かい、グリセリンの瓶を開くと、「お母ちゃんは4回(200cc)、あかねは2回(100cc)でいいかい？」と尋ね、お義母さんは「いいよ。」と応え、あかねも小さな声で「いい。」と応え、靖文さんは台所に行って計量カップに150ccの水を入れ、その後グリセリンの瓶の蓋を開いて150ccを入れて300ccの浣腸液をこしらえました。

夫が「お母ちゃんから先にするよ。」というと、お義母さんはバスタオルの載った布団に歩み寄り、四つん這いになって寝巻をめくり、パンティを下げて浣腸を受ける体勢を整えました。

実は入浴時ですが、私が夫に、「お義母さんに浣腸するときはその前に、3分程度直腸内を指でマッサージしてあげてね。」と伝えておりました。

夫はそのとおりにお義母さんの肛門から、右手人指し指にすくったクリームを肛門周辺から直腸内に丁寧に塗ってから、3分程度マッサージしたあと、浣腸器で4回(200cc)注腸しました。

そのあと3分程してパンティを履き寝巻を降ろして起き上がり、便所に行つて排泄を終え、部屋に帰ってくるど、「靖文、充分出たよ、体が軽くなった」と笑顔でいいました。

お義母さんは、「あかねちゃんも浣腸を試みなさい。気持ちがよくなるから。」と言い、私もパジャマを上げてパンティを脱ぎ、布団に敷かれたバスタオルの上で四つん這いの態勢を取りました。

夫は充分すぎるくらい直腸内を指でマッサージしたあと2回(100cc)注腸して一階のお便所に走り排泄を済ませました。

その間にお義母さんは浣腸器などを台所で洗浄してくれていました。

8 二階での会話

その後、お義母さんは一度テレビを見るために居間に来ましたが間もなく奥の部屋に戻り、私たちは居間で午後9時までテレビを見てから二階に戻りました。

二階に戻るとリビングの明かりを落として窓を開きました。

椅子を並べて眼下に広がる広大な森林とはるか向こうに微かに見えるビル群、そして天に広がる夜空を眺めて、ビールを飲みながらこんな話をしました。

「靖文さんはお母さんに浣腸するのは初めてだった？」

「うん、初めてだった。」

「お母さんの恥ずかしい部分を見て、どう思った？」

「恥ずかしかったよ。母の黒ずんだ性器や肛門を見るのは正直驚きだった。けどね、あかねに教えてもらったとおり直腸内をマッサージしたことは自分でも成功だったと思うんだ。母も歳をとって垂れ下がったお尻や黒ずんだ性器、肛門でも、それは何歳になっても消すことが出来ない「サガ(性)」を持っているように思えてね、その「サガ(性)」を適度に癒すことは必要ではないかと思ったんだ。」

「うん、私もそれでいいと思うの。けど、サガ(性)を解消するために母子SEXなんてことは絶対やめてね。」

「自分もそれは嫌だよ！」

夫はそう言っただけで笑いました。

暫くして、酔眼の私は小型冷蔵庫の前に行きました。

新たなビールを取ろうとして…突然脳裏に、歳をとった私が将来生まれるのであろう我が子(と思われる男性)に浣腸されながら、先ほど私がダメといった母子セックスをしてもいいのではと考えている自分の姿が浮かびました。

ダメダメ、変な妄想をしてはダメと冷や汗を拭きながらビールを取りだして椅子に戻りました。

9 愛の折檻

ビールを飲んでいる靖文さんに、「あかね、今日はとても酔ってる…ここ(性器を手で触らせて)の火照りが引かないの。ネエ…私にまた、愛の折檻をお願い出来ませんか？」と耳元でささやきました。

夫も酔眼で、「今夜もあかねには厳しい折檻が必要だね。」と言い、二人は空になったビール缶と軽食の皿をテーブルに残して隣の寝室に移りました。

酔眼の夫は奥の納戸に行き、収納箱から200ccの大型浣腸器と便器、ローション、それと、先月出張時に買って以来何度か利用している膣開発用の大型バイブと細身のバイブをベッドに持ってきました。

私はお手洗いで水1リットルを計量カップに入れて戻ると、夫は私をベッドの上で全裸・四つん這いにしました。夫は私のお尻側に腰を降ろし、人差し指にローションをたっぷりつけて直腸内部をいじり回して、私は口からはウーンウーンと小さな声が漏れ出していました。

そのあと水を入れた200ccの大型浣腸器の嘴管を肛門にあてて、周辺を優しく弄ったあとに、3回にわけて600ccを注腸。

数分間我慢をさせて、ベッドの横に置いたバケツに両膝を開いて排泄させられ、その後うつ伏せにして、夫は優しく肛門をティッシュペーパーで拭いてくれました。

次は私の番です。再びお手洗いで計量カップに水を1リットル入れて戻り、夫を全裸・四つん這いにさせて、お尻側に座り、右手人差し指にローションをつけて、直腸内を3分間いじりました。

その間、後ろから右手で男性器を前後にいじり続け、後に大型浣腸器で5回にわけて1リットルを注腸し、数分間我慢させて、私が排泄したままのバケツに両膝を開いて排泄させました。

その後優しく肛門をティッシュペーパーで拭いてあげました。

次に、仰向けに寝る夫の腹の上に、私が逆方向でうつ伏せに乗りあがり、夫の固くなった性器を両手でつかんで口に含み続け、夫は眼前で露わになった私の性器や肛門をなめ続けました。

こんどは、夫が私を仰向けに寝かせて、ローションを使いつつ、大型と細身のバイブを使って性器内部や肛門を激しく刺激して膣感覚をあげるようにすると、私の口からはウーンウーンと小さな声は漏れ続けました。

それからは一時間を超えて「愛の折檻」の始まりです。

夫は私の身体を優しく愛撫を繰り返したあと、左手でクリトリスを中心に刺激を与え続けつつ、右手指二本を使って膣内のマッサージを始めるのです。これが、あかねが夫に自らお願いした、「愛の折檻」なのです。

「愛の折檻」とは私たち夫婦だけの合い言葉ですが、二人で購入した専用のCDを基に、何度といわず繰り返した経験を通して得た最適時間です。

Gスポット刺激を15分、括約筋刺激を30分、そしてポルチオ刺激を15分の計一時間を連続刺激し続けることで、私の悲鳴がウツ、ウツ、ウーンウーン、グウググ、グウググ、ウツ、ウツ、グウググ、グウググ、グウググと止まることなく続くのです。

その悲鳴は口で押さえているにも拘らず、寢室の窓を通り抜け、深夜の闇の中に流れていきました。

その後彼は、コンドームをつけたまま、激しくウウウウウーと悲鳴を上げる私に15分を超える厳しい性交を重ねて、二人は果てて睡眠に入りました。

翌朝、休日の7時に目覚めた私は夫に先立つて身の周りを整え、二階を降りていきました。庭で飼い犬に餌をやるお義母さんに気づき、「お義母さんおはよう。」と声をかけました。

するとお義母さんは以前にも増してうるおいとハリのある笑顔で「おはよう。」を返してくれました。

靖文さん、私の書いた文章はどうだった。感想聞かせてね。

